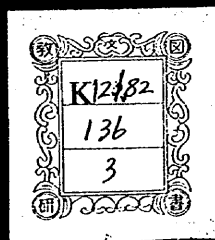
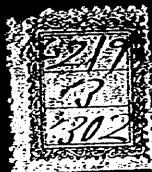


新日用文讀本

卷の三



K121.82

136

3

# 新日用文讀本

卷の三

新日用文讀本卷の三

芦田惠之助編



一 手紙をならふ心得

今の世に用おられてゐる日用文には、口ことばのまゝを書いたものと、候ふといふことばを用ゐたものとの二様があります。



新日用文讀本

巻之三

新日用文讀本 卷之三

芦田惠之助 編



紙となりふ心得

今の世に用おられてゐる日用  
文には口ことばのまゝを書い  
たものと候ふとりふことばを  
用ゐたものとの二様がありま

す。候ふ文は、ふるくより用ゐられてをりますから、ほとんど、我が全國に行はれてゐますけれども、いふまゝをかいたものは、やうく、近頃、に用ゐはじめられたばかりです。から、まだ行きわたつては、おませぬ。しかし、實際、候ふ文は、不便です。から、ゆくゆく

くは、いふまゝ、を書いたものになければなりません。また、たとへて、いはば、皆さんは、候ふ文より、いふまゝをかいた文にうつるわたしは、にをるので、すから、やむをえず、二様の日用文をまなばねばなりません。又、いま一年たれば、皆さんは、教育ある國

民として、世にたつのですから、  
普通の日用文は、よめもし、書け  
もしなければなりません。され  
ば、二様の日用文をまなびて、世  
渡にさしつかへぬ用意をせら  
るゝのは、皆さんのために、大切  
なることとぞんじます。俄ふ文  
は、二年三年のものにくらべて、

いくらかむづかしからうとは  
思ひますが、前にのべた通りの  
わけですから、御しんぽうなさ  
つて、げいこをせらるゝよしに  
ねがひます。私も皆さんがなら  
ひやすいよしに、せいぐ、玉夫  
をいたしますから。

四月一日

若田惠之助

四年生のかたぐ

二 門司より太郎の手紙

一昨日、午後一時、鹿見島を出帆して、つゝがななく、長崎に着し、それより、たゞちに肥後にいた

り、熊本に一宿いたし、修ふ。今朝六時發の汽車にて、博多に達し、こゝを、一見して、只今門司につき申し修ふ。御安心下されたく候ふ。

太郎

父上様

### 三 姉のもとへ

この頃は、まことにあたゝかに  
なりました。姉さまには、おかは  
りなく、日々おつとめなされま  
すか。たくにも父上、母上をはじ  
め、弟も、妹も、ちよーぶでくらし

ておます。私は、学校からかへり  
ますと、母上のでつだひをしな  
がら、さいほーや、料理法などを  
教へていたゞきます。この後は、  
をり〜おたよりをいたしま  
すから、どうか姉さまからも。

はな

姉上様

四 わらび通りにやまふ手紙

昨夜の雨で、野にはわらび、谷には山うど、いたどりなど、たくさんに出ておませう。明日は朝はやくより、それらをとりに行か

うとぞんじますが、君はいかゞですか。只今お花さんや、三郎君をも、さそひにやりましたから、なるべく、市同道をねがひたいものです。

大川丈夫

大山太郎君



五 わびの手紙

狸のいたづらより、かゝる合戦に及びしこと、全く我等のあやまりにて、何とも申わけのいたしかたござなく候ふ。この後は、よくよく心得て、かならず害を

いたさず候へば、このたびのみは、平に御許し下されたく候ふ。  
けもの王

鳥の大しよ一殿

六 でおちをよひ入る廣告

でつち入用につき、試験の上や  
とひいるべし。のぞみのは、  
本月中に申出でられよ。

年齢 十二歳より、十五歳ま  
で。

教育 尋常小學校卒業以上。

高田商店

七 人形をおくる手紙

昨晚父が京よりかへりました  
みやげに、うつくしい人形をも  
らひました。まことにかはゆら  
しく、さはらば、笑ひだしそ一  
すから、一つさしあげます。

ふみ

お千代さま

ハ お千代のへんじ

御まちなされし又上様のおか  
へり、いかに、情よるこびなされ

しならむ。さてたゞいまは、かは  
ゆらしい人形をたまはり、あり  
がたくぞんじ候ふ。きものをま  
せたるに、おほせの通り、笑ひ出  
しそしに候ふ。名をお花とつけ  
て、明日は、お宮につれてまゐら  
むとぞんじ居り候へば、かなら  
ず御こし下されたく候ふ。

千代

おふみさま

九 復習會に入會をすむる手紙

先日、御話し申し、暑中休暇中の復習會のこと、二三の友人に

もはかりしに、みなく、さんせい  
いに依ひま、いよく、来月一日  
より、宅の二階にて朝七時より、  
おほよそ二時間、讀書、算術の復  
習をなすことに定め、依ふ御さ  
しつかへなくば、御入會くださ  
れたく依ふ。

太郎

丈夫君

十 まつりに友をまねく手紙

来る九日は、氏神様のまつりに  
は、座敷へば、御妹さまもともに、  
御いでくだされたく候ふ。

わけて、今年には、花火つくりもの  
かどの、もよほしもあるよしなれ  
ば、定めし、いそひはしからむとぞん  
じ候ふ。弟は、早、あなたの御出で  
あらば、ともせむじか、くもせむじとい  
る、いる用意をいたしをり候ふ。

ちよ

おはなさま

十一 野中兼山の手紙

此のたび、帰國いたすべく候ふ  
につきて、何かめづらしき御み  
やげをと、いろく考へたる上、  
土佐の海には、いまだかつてな

きハマグリ貝といふものを、さ  
しあぐることといたし候ふ。さ  
いはひに海上つゝ、がなく候は  
ば、遠からず御目にかけて申すべ  
く候ふ。ばかりながら、このこ  
と、一家中に成つたへくだされ  
たく候ふ。

野中兼山

御家老様

十二 病氣見舞の手紙

一昨日より、君の御出校なき故、  
あそび仲間が一人かけて、まこ  
とに、さみしくなふ。只今、小太郎

君にきけば、風のために、おやす  
みのよし、市様子は、いかに、日頃  
より、つよき君なれば、ほどなく、  
こゝろよくならるゝならむと  
は、ぞんじおへども、しかし、十介  
にきをつけたまへたが、君の出  
校せらるゝ日をまつ。

大川丈夫

# 大山太郎君

## 十三 太郎のへんじ

風くらゐは、何のそのと、常にあ  
などりしばつか、このたびは、き  
ついにあひ申し候ふ。ふとん

の中にあることの苦しければ、三言  
今朝も出校せむと用意せると  
ころへおいし、やさまのお出で  
になりて、なほ二三日は、外出を  
禁ずるよし、申付けられ候ふ。君  
たちが日々おもしろくあそば  
る、ならむと思へば、ねてある  
ころもいたさねど、やればと



て、せんかたもななくおふ。今後は、  
おほせにしたがひ、十分に養生  
して、一日もはやく出校の出来  
るよーにいたすべくおふ。

太郎

丈夫君

十四 入營を祝する手紙

明後日はいよく御入營で、お  
めでたうそんじます。私はおね  
て、お見立て申さうと思つてお  
ました。が、ちよーど、その日に、學  
校の遠足がありますので、まこ  
とに、ざんねんでござります。は

入営になりましたら、御身を大切になさりませ。休暇になりましたら、早くおかへりなされて、軍隊のおもしろきはなしをおきかせください。この手帳は、おいはひにとて、求めてたいたのですから、さしあげます。

大川丈夫

國野久様

十五 欠席届

欠席届

昨夜より、頭痛にて、こまりをり  
継ふ故、本日は、欠席いたし、継ふ。

尋常四年甲組

三月七日 大山太郎

秋山先生

夫 金時のてがみ

頼光様の御供をなして、大江山の鬼を退

治たるあらましを申し上げ候ふ。京にま  
します。天子様に御いとまごひを申  
上げよろこびいさみて出で立ちたるは、頼  
光様をはじめつなきたみつすゑたけ、  
私を合せて五人に候ひき。いづれも山伏  
のすがたとわりて、丹波の國にむかひし  
が、音に名高き山國にて、思の外日敷をか  
かり候ひき。さて、みたけ神社にまおりて、

一同はがちいくやめいのりをなし、神様  
よりは、神使鬼毒の酒といふ毒酒を  
いたゞき、これを力に、大江山へむかひぬ。大  
江山はのぼれども、くゞいづこがいたゞ  
きとも知られぬほどの高山にて、一同大  
にちやみしがはるかの谷川に、衣を洗  
ふ女を見付けたり。この女は都にて名  
ある人の娘なれども、鬼にとりへられ

て、いかに来りしものなれば、我等を見  
て、よろこばるゝこと限りなく、さつそく  
そのかたに、案内をたのみて、鬼のすみ  
かにまゐりぬ。やそ一夜のやどりをこひ  
しに、鬼もいゝるよよく許して、一間にとほ  
し、燈ひき、暮れがたより、鬼とともにさ  
かもりをひらき、かの神使鬼毒の酒  
をすめしに、のむにつれて、鬼はくる

しみ我等はのむにつれてますますい  
ほひをましうたふものまふもの一時は  
なかくのさわまなりしが鬼どもはぢ  
がて前後も知らずうちふしほひま  
我等はまぢまうけたることをれば  
すぐに身じたくをちしかたはしより首  
をうちおとししがなまゑひの鬼ども  
は命ばかりはとて手を合すもあは

れにほひまき鬼の大將しゆてんどーじは  
この物音に目をままし、いまやたちあが  
らむとする時頼光様はうしろより  
ちやうと、その首をうちたまひしにまら  
れし首は鏡のよーなる目をむきいだ  
し頼光様の脚がぶとたしかとかみつき  
ぬやれど脚がぶとは齒のとほらぎ  
りしため、少しも脚けがはなくほひま

かくて鬼どもをこころづく退治し、  
の夜はこゝにあかして翌朝よりいび  
たまふおひめさまがたをともちひ山を  
下りて都へといそぎぬ都につけばお  
ほせいの出迎ひ人々にほめられながらす  
ぐに御所にまゐり、鬼退治のさまを  
申上げたるに、天子様の御まんど  
く一方ならずいろいろありがたき御こ

とばをいたゞき申し候ふ。この切により  
て身分ある武士とちなり、身にあまる  
出世をいたし候ふ。これといふも皆母上  
の御高恩とあけくれなつかしく  
どんし候ふ。近日のうちにむかひのも  
のをつかはすべく候へばかならず御  
のぼりくだされたく候ふ。

坂田金時

足福山の  
母上様

明治三十五年五月二十五日印刷  
明治三十五年六月一日發行

卷ノ一 定價金 六錢  
卷ノ二 定價金 七錢  
卷ノ三 定價金 八錢

著作者 芦田惠之助

發行兼  
印刷者

村上勘兵



印刷所

京都印刷株式會社

京都市上京區東洞院三條上ル町

村上書店

長距離加入(電話拾五番)

發兌元



芦田惠之助著

於けるに  
小學校に  
今後の日用文及教授法

全壹册 定價金拾八錢  
郵税金貳錢

219  
3  
302

120.8  
125.8

